

令和6年度第1回奄美市総合教育会議

日 時：令和6年7月30日（火）9：45～11：45

場 所：奄美市役所本庁舎5階大会議室

出席委員：（市長部局）安田 壮平 市長

（教育委員会）向 美芳 教育長

恵上 イサ子 教育長職務代理者

西 正和 教育委員

荒田 朋寿 教育委員

関係者等：福山 八代美 スクールソーシャルワーカー

松元 ひとみ スクールソーシャルワーカー

傍 聴 人：0人

議 事 録

○市長あいさつ

本日はお忙しいところ、また、朝の貴重なお時間にもかかわらず、今年度第1回の総合教育会議の御案内を差し上げましたところ、多くの皆様に御参加いただきまして、誠にありがとうございます。教育長をはじめ、教育委員の皆様、そして、スクールソーシャルワーカーの福山様、松元様には貴重なお時間を頂き、心から感謝申し上げます。また、皆様におかれましては、日頃から本市教育行政の推進に多大なるお力添えと御貢献をいただいておりますことに、重ねて感謝を申し上げます。

この奄美市総合教育会議は、年3回、理想としては各学期に1回ずつやっていこうということで進めているわけですけれども、前回から不登校支援をテーマにして、いろいろ議論をしているところでございます。この不登校というテーマは、奄美市においても以前からある、そして決して楽観視できない重要な課題であると思っております。日本全国においても20万人以上の小中学生の不登校がいるという統計が発表されていますし、また奄美市においても、たびたび議会でも取り上げられていますけれども、昨年度の時点でも100名を超える不登校者がいるということであり、子どもの数が年々少しずつ少なくなっている中ですけれども、本当にこのままでいいのか、もっと市として、あるいは教育委員会として取り組めることがないかということを考えていく場にしていきたいと思っております。前・村田教育長も、この不登校支援に力を入れて取り組んでいただいておりますし、今回から初めて参加をしていただく向教育長においても、様々なインタビューなどで、この分野についてしっかりと力を入れていくという心強いお言葉も頂いているところです。

今日はぜひ、スクールソーシャルワーカーのお二人、そして、行政の福祉部門の取組なども参考にしながら、これは決して教育現場、教育行政だけの課題ではなくて、市全体として、また民間も一緒に取り組んでいくというテーマだと私は思っていますので、よりよい一歩を踏み出していくための、中身の濃い議論ができればというふうに思っております。

どうか、今日のこの総合教育会議が実りの多い会議となりますことを心から願ひまして、開会に当たっての挨拶とさせていただきます。

○協議事項「不登校支援の充実について」

「SSW・SC・保健福祉部と連携した取組みについて」

(学校教育課説明)

資料に沿って説明

○協議資料「令和6年度奄美市総合教育会議資料（不登校関係）」PDF

(福祉政策課説明)

資料に沿って説明

○協議資料「こどもの家庭生活実態調査の概要と福祉政策課の業務について」PDF

○協議資料「奄美市子どもの学習・生活支援事業 概要」PDF

○質疑応答・意見

(市長)

今日はせっかくスクールソーシャルワーカーの先生方にも来ていただいていますので、現状を教えていただきたいと思ひます。また、前回私が質問した中で明確な回答を頂いていないものがあって、スクールソーシャルワーカーの先生が全9名ということですが、関わっている児童生徒数は1人当たりどれくらいかを知りたいのと、あと、業務に当たっていただく中で、課題に感じていることや改善すべきことがあれば、詳しく教えていただければと思ひます。

(スクールソーシャルワーカー)

私たちは9人でスクールソーシャルワーカーをやっていますけれども、関わっている子どもの数は相当います。1人当たり平均10人近くいると思ひています。

それと、私がいつも思っているのは、見えない、気づかない、生活の貧困です。なかなか食事をとらない子どもたちも、現在、本当に実際います。しかし、それがなかなか見えない。私たちは家の中に入ります。先生方は家の中まで入っているような支援をすることはできないんですけど、私たちスクールソーシャルワーカーは、家庭の中に入って支援ができるという仕事だと私たちは思っているんで、私は環境調整という形で、学校、親、私たち、各機関の方々との連携をとりながらやってるんですけど、私たちがとにかく感じるのは生活の貧困です。私たちがいつも話をしているのは、親に意識や知識があるような方たちの不登校という問題自体は、そんなに心配はないです。いろんな形で、経済的なことで、いろんなところに行かせるという、親が選択することができます。しかし、貧困の中での不登校という場合に、どこにも選択肢がありません。結局、その中でひきこもりになってしまう。私たちは中学校までは関わることはできますけど、中学校を卒業して、高校に行かない場合、親がどこにもすすがるところがないです。私たちは今現在、子どもが高校に行っても、高校の場合はスクールソーシャルワーカーがないので、実際、親からの相談は

たくさん受けます。夜中にくることもあります。しかし、それでも聴きます。やはりそこで、親が大変なときに、一緒に時間を共有しなければ、信頼関係がなかなかとれないので、すべてのスクールソーシャルワーカーは長年、ずっとそれをやっています。別のスクールソーシャルワーカーも、朝6時に子どもたちを起こしに行ったり、子どもの制服のアイロンをかけたり、受験のときに連れて行ったり。そういう積み重ねで、子どもたちと私たちは関わっています。

特認校のことですけれども、特認校にスクールソーシャルワーカーをどうしても配置してほしいという要望を私はずっと持っています。それは、原籍校で不登校になって特認校に行っても、改善されることというのはそんなに多くはなくて、しかし、特認校で不登校になった場合には、本当に関わる術がないです。だから、特認校にも、何かがあったときには原籍校のスクールソーシャルワーカーを行かせてるんですけども、場所的にも遠い。訪問に行くのも学校側も困難。やれることが少ないので、どうしても特認校へのスクールソーシャルワーカーの常駐が本当に必要だと私は思っています。

さっき言ったとおり、子どもたちは親を異常にかばいます。食事がとれない子どもは非常に多いです。しかし、子どもたちに「食べたの」と聞くと、「食べた」と言います。「何を食べたの」と聞いたら、本当に食べたかのようなことを言います。しかし、私たちが家の中に入って、生活の中で、必要な食べ物がないこともよく見てます。その中で、どうしても母子分離をしたほうがいだろうと判断をすることもあるんです。それも非常に難しいことで、親もそれを望んでいない。子どもも望んでいない中で、親を説得することも非常に難しく、虐待以外に児童相談所がなかなか関わるのがすごく難しい、困難な状態になっているので、不登校であったりネグレクトであったり児童相談所に行っても、結局、福祉のほうに返ってくるので、福祉政策課の方々には非常に関わっていただいて、いろんなことでケース会議を持ちますが、解決できないことばかりです。しかし、解決できないからこそ、長い間関わっていく。この子どもたちが大人になって、そして、その子を見届けていくという、私たちは学校以外でも地域としてそこを見ることができるので、そういう形で私たちは今関わっています。

それと、母子家庭、父子家庭が非常に多いです。今、父子家庭に私も関わっているんですけど、言葉に出ないぐらい大きな問題があります。食べるものにしてもそうですけど、母親が父親代わりになることは可能なことなんですけども、やはり父親が母親代わりになるということは非常に難しい困難があると思っています。

それと、今、理由のない不登校というのが非常に多いです。明らかに友達のいじめとか、学校が嫌だとか、先生が嫌だとか、そういうことではない、理由のない不登校。私たちも関わり方が非常に難しいですけども、ずっとそこに関わっています。

それと、ヤングケアラーの実態です。どこからヤングケアラーとして認めるのかはすごく難しいことです。私も関わりましたが、大人になっても、ヤングケアラーを経験した子どもの代償はものすごく大きいと私は実感しています。

私たちの仕事は、何をしてるんだらうって思われているかもしれないんですけども、私たちは家庭の中に本当に入ります。私たちが関わるのは子どもたちだけではありません。

私はいつもスクールソーシャルワーカー全員に言っていますが、子どもを救うためには、親の支援を必ずしてほしいと。やっぱり親を支援しないと、子どもたちを助けることができません。親たちがどんな親に育てられ、どんな家庭で育ってきたかというのを、奄美市のような小さなところで、私たちはそれを見ることができですが、生活が困窮している中の不登校の改善をどうしていけばいいのか、私たちも非常に難しいところです。

白百合の寮いう施設があります。その中で幼児部が十何名います。その子どもたちの半数の親を見ました。これが現実です。小中学校のときに関わった子どもたちの、その子どもたちが、また児童養護施設に預けられている。この負の連鎖を断ち切らなければ、奄美市は本当に大変だなと、私は毎日思って、こういう形で子どもたちと関わっています。

答えのない、解決もしない問題に、私たちスクールソーシャルワーカーたちはがんばっていて、本当に感謝しながらなんですけど、ひとつその例を挙げてもらえますか。

(スクールソーシャルワーカー)

私は、小宿中学校区でスクールソーシャルワーカーをしています。今、ちょうど7年目になります。PTA活動のほうを積極的にやっていた縁がありまして、この仕事を受けました。1年目は何をしたらいいか分からずに始めました。とりあえず何か役に立つことがあればと思いましたけれども、私は目の前にある学校の中での問題に取り組んでいるのが現状です。もう7年目で、毎年、今年で終わろうかなと思いつつ、ただ、毎年毎年上がってくる小学生、中学生を見ると、どうしても信頼関係ができて、夜にLINEが来たり、相談のメールを送ってくる親、中には子どももいるので、いつまでも、今年で終わることができずに、今もまだ続けている状態です。なので、日々10名ぐらいと言いますが、全ての子に精一杯関わることができてるかというのは、はっきり分かりません。そして、本当に何ができてるかというのも分からない状態です。日々、目の前にあることに真摯に向き合うことしかできない現状です。

ただ、7年目になって思うのは、先ほどから福祉政策課の話などにもあるように、貧困の話も出ています。そういうことを考えていくと、私たちは本当に日々のことに向き合っているだけなんですけれども、負の連鎖と言っているかどうか分からないですけど、それが続いていることを考えると、やはり本当に、母子手帳をもらう段階から、お母さんになったときからの考え方や生活の力、どういう環境でその人が育ってきたか、そういうのを含めたところでしないと、本気でそこに関わっていかないと難しいのかなと思っています。小学校に上がったときに、先生たちは制服の様子や髪の毛、朝の登校の様子から生活のほうを振り返っていきますので。そういうところから手をかけることによって、よくなる子もいます。ただ、変わらずに、本当に重い不登校になるお子さんもいます。特に気になるのは、どちらかというと男の子のほうが多いのかなと思っています。理由のない不登校、私たちも何なんだろうっていうところが分からないのは、何となく男の子のほうに多いのかなというのがあります。生活の中にも、離婚率が高かったり、全てがそうではないんですけど、やはりお母さんの生活力だったりとか、生活のやり方だったりとかいうのが足りていない。なので、朝早く行って、リズムよく関わることが、生活を整えることなの

かなと思って、365日のうちの360日ぐらい、朝6時半とか7時とかに行った家庭もあります。大事なときの制服のアイロンがけとかをして送り出す、母親代わりにやったことも確かにありました。なので、先ほどから言っているように、家庭の中に入るのも、玄関先での「おはようございます」から信頼関係を整えるまでも、本当に定期的いきちんと真摯に向き合わないといけない。それをほかのスクールソーシャルワーカーもやっています。ただ、みんながみんな、それでうまくいくということでもなくて、時として迷惑がられたりとか嫌われたりとか、そういうことも実際ありながら、この仕事を続けています。なので、生活を整えるためには、私たち自身も覚悟を持って、その人たちに向き合わないといけないということをやっているのが現状です。なので、本当に何が不登校対策が一番大事なのかというのは、明確に私たちも分からないんですけども、この地域だからこその、日々の人とのふれあいの中からできる力というのは、この地域だからこそのものだと思いますので、教育委員会や福祉など、いろんなところがいろんな問題を提起することも本当に大切であるし、地域全体で取り組んでいく昔ながらの人と人とのつながり、そういうことはいろんな地域の行事の中でも育まれるものじゃないのかなと、子どもたちに力を与える、親ができなくても隣のおばさんができることでもあるのかなとも考えます。

あとは、不登校にはいろんなタイプがあって、なかなか学校になじめない子たちもいる中で、個人的な意見を言えば、奄美には歴史や伝統、基幹産業の大島紬とかありますけど、そういうのをもう少し取り込んで、学習にはついていけないけれども、体験型の奄美の歴史や文化、紬にも工程がたくさんありますから、そういうものをちょっと体験するものがあって、学校にちょっと足が向くものがあれば、そういうきっかけ、私たちのような人とつながったり、先生とつながったり、いろんな人とつながるきっかけは学校にもたくさんあると思うので、そういうのもあったらいいのかなと思っています。

先ほどの特認校の話なんですけど、実際、小宿小学校で、小学校になじめずに、崎原小に行った女の子がいました。でも、住んでるところは平松なので、そこから崎原まですごい時間がかかるんですよ。それで、最初はよかったんですけど、つまりいて行けなくなったときに、私に声がかかって、それから小宿小をみながら崎原まで行って、その子が帰りたい、帰るって言うまでずっと待って、連れて帰ってきた日もあったんですけど、今はやはり、自分の地域の小宿中に行きたいってことで、中学校から戻ってきました。そのときのつながりがあったからこそ、私はその子の家にも通って、今、中3、やっと復学して、受験に向かって毎日学校に来るようになってきている子もいます。なので、特認校は、いろんな理由で行くと思うんですが、スクールソーシャルワーカーが関わることによって、ちょっとした時間、心の拠り所になる子どもたちもいるので、その辺も考えていただけたらありがたいと思います。みんなで知恵を出し合って、社会教育全般で子どもたちのことを考えることも大切なのかなと思っています。

(学校教育課)

先日、名瀬小学校のSSWの報告書を受けたんですけど、延べ10人から15人ぐらい、1

日3～4時間しかない中で関わっていただいて、月で延べ60人ぐらいです。関わっていただいた子だけでそのぐらいだと思っていただきたいと思います。

（教育委員）

市の政策で、奄美市の学習支援事業というのがあるんですけど、大変すばらしい取組だなど思っております。このチラシの中に、「夏休みの宿題を一緒にしましょう」、「夏休みの受験勉強、夏休みの宿題を一緒に勉強しましょう」ということで、このチラシができてるんですけども、実際に夏休みに入ってから、どれぐらいの児童生徒が利用してるのか教えていただけないでしょうか。

（福祉政策課）

夏休みに入っすぐなので、まだ報告を受けてないところでした、今のところは御報告できない状況です。

（教育委員）

この指導に当たる方というのは、指導員が1名、補助員が1名、それからオンライン支援員の鹿児島大学生が2名と書いてあるんですが、実際この指導員という方は、教員の免許を持っていらっしゃる方ですか。

（福祉政策課）

先生の経験というのは聞いてないんですけども、塾の講師をしていたということで聞いております。

（教育委員）

今までの総合教育会議で、今日の会議が一番、心に残る会議でした。私も長年、中学校の教員をして、救えない子どもたちがいっぱいいました。今日はスクールソーシャルワーカーのお二人の話を聞いて、今でもそんな子どもたちや家庭もいっぱいあるんだよなというので、胸が締め付けられる思いがしてなりません、私たちも現場にいるときに、全ての関係機関との連携というのをとても声を大にして言ったんですけど、口だけで言ったような気がします。今日のような、実際に関わっている人たちであったり、福祉の面での実態、そういったものを知り得て、すばらしい会であったような気がします。でも、これをただ今日の会議で終わっては何もならないので、それぞれ教育委員会、教育長をはじめ、市長、そしてそれぞれ関わる中で、もっとみんなで真剣に取り組まなければならない大事なことなのかなと。私たちは、子どもたちが元気で学校に通って、親子の会話の中で笑顔いっぱい夢と希望を持っていく子どもたちを育てていく。そういう奄美市でなければならないはずなのに、やっぱりそういう貧困生活の中で出てくる不登校、理由なき不登校もいっぱいあると思いますが、もっとこの実態を、いろんな場面でいろんな人たちに分かってもらいたい。分かった上で、もっと協力すべきことがいっぱいあるんじゃないのか

など思っている1人です。私たち教員も、もっとこのスクールソーシャルワーカーや相談員の人たちと心をつなげて、もっと深く踏み込んでいってもいいのかなど思っているので、ぜひ、向教育長、校長会、教頭会あるいは生徒指導部会、そういったところで、こういう人たちが一生懸命頑張っているという姿を、声を大にして伝えて、そしてみんなで協力できる場所、もっとみんなで実態を知るべきこと、そういったところをもっと深く掘り下げていくことも、これから大事なことになるのかなど思っているところです。

今日は、私たちも知らない実態を知るいい機会になって、委員の1人として、市民の1人として、もっと関わっていくべきことが見えたような気がして、とてもいい会議であったような気がします。28校ある中で9人というのはとても少ないような気がします。こんなに不登校がたくさんいるという中で、ある程度、子どもの教育にはお金をいっぱいかけてもいいと思うので、ぜひそういった支援員やスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーをもう少し、人選をしながら増やしていただければありがたいと思います。

（教育委員）

教育委員会と福祉政策課の説明で、今の子どもたちはいろんな支援を受けておられるんだなと感じたところでした。また、スクールソーシャルワーカーのお二人がいらっしゃってますけど、毎朝、いろんなところに足を運んで子どもたちに声をかけてる姿を見てるんですけど、そういう活動で少しでも不登校の人数が減っていってくればなと感じたところでした。

質問になるんですけど、教育委員会の説明の中で、6ページなんですが、不登校の起因の中で、学校が20.3パーセント、家庭が10.6パーセント、本人が63.2パーセントとあるんですけど、本人の起因が一番多いんですけど、学校の20.3パーセントというのも結構大きい数字なのかなと感じたところでした。この20.3パーセントの内容をもし把握ができていたら教えていただきたいのと、解決できているのかを知りたいと思います。

それと、福祉政策課の御説明の中で、支援が必要な児童や保護者が多くなっているとありましたが、その人数の把握ができているのか、これがだんだん減っているのか増えているのかを教えていただければと思います。

それと、スクールソーシャルワーカーの方が時間を惜しんで活動されていると感じてるんですけど、スクールソーシャルワーカーの増員は可能なかどうかを教えていただければと思います。

（学校教育課）

文部科学省が不登校の原因を8つに分類しており、その中で、学校や教職員との関係をめぐるとか、いじめを除く友人関係の問題とか、というふうに捉えています。ただやはり、いじめとか教職員に対する人間関係に関することでもありますので、いじめに係る不登校は絶対に出さないというふうに、学校にも4月から5月にかけて強くお話をしたところでしたので、そこに関しては今のところ、奄美市では出ていない状況になります。また、

教職員との関係も、また今後、改善していけるような体制を整えていきたいと思っております。

(福祉政策課)

家庭児童相談室の相談件数の推移でお答えしたいと思います。相談件数が、令和3年度が747件、令和4年度が550件、令和5年度が890件の相談が寄せられております。不登校に関する相談は、不登校だけに関する相談というか、家庭からの相談の中で、特にその世帯の問題は不登校であろうというような感じのときに「不登校」にカウントする形にしますので、それが令和3年度は16件、令和4年度は20件、令和5年度は20件の不登校に関する御相談が寄せられております。

(教育長)

スクールソーシャルワーカーの増員に関して、その答えはここではできないんですけど、まず今出てきた不登校の要因について、これは複雑に絡み合っています。ですので、その原因は何かと突き止めるのは、今の実態ではあまりふさわしくないのではないのかというのがまず1点です。

それから、スクールソーシャルワーカーの方々の努力に大変感謝しております。問題は、今せっかくこうしていろんな組織が集まっているわけだから、なぜ総合的にということかという、いろんな負担が一つにいかないように、お互いがすみ分けをして、どこからどこまでができるんだという、そういうしっかりした活動の形を具体的にする必要あるだろうと。そうしないと、いつまでたってもスクールソーシャルワーカーの方々にばかり負担がいて、結果、解決がなかなか難しい。一番大事なのは学級担任なんです。学級担任と子どもの絆みたいなものがまず最初にないといけない。そこでの気づきが、やがてスクールソーシャルワーカーの方々に伝達されて、そしてまた、福祉政策課や、いろんな居場所づくりをしている民間のNPO法人、そういったところにも広がっていく。ですので、まず最初の気づきが大事だと思うんですけど、今、いろんなことを出されましたので、その気づきをもとに、ケース会議なりをしながら、何ができるのかというのを話し合っ、そして、それぞれでそれぞれの方向を目指してやっていくという、そういう形が非常に望ましいんじゃないかと思っているところです。

私の考えでは、40人学級の中にだいたい5、6人は、潜在的な不登校、要するに、いつか、何かのきっかけで不登校になる生徒がいるだろうと。そういう子どもたちを出さないようなことも、一方でやっていかなければいけない。むしろ、出てきた子どもたち、不登校になってしまった子どもたちへの対応は、ある程度、こうしてみんなで話し合っできるけども、潜在的にいつあってもおかしくない、そういう子どもたちを救うための方策というのを、私たちはもっと強くしていく必要があるんじゃないかなと思っているところです。そのためにはどうしたらいいんだろうかと、そういう話し合いがなかなかできてない気がしてならないんですけども。今後、そういうことも含めた政策や方策を話し合えればなと思っております。

(市長)

話を聞いて、不登校という、子どもに表れた現象だけではなくて、その背景にある家庭のことや複雑ないろいろなことを総合的に対応していかないと、根本的な改善というのは難しいだろうということを改めて感じたところであります。

幾つか質問のやりとりをしたいと思うんですけども、まず、福祉政策課の生活実態調査を踏まえて、何か新しい取組や政策を考えているのか。その際、しっかり教育委員会との連携を図りながら考えようとしているのかを伺います。

(福祉政策課)

市長の質問にありましたとおり、子どもの生活実態調査は令和5年度に実施したものでございますので、令和6年度に子ども対策検討委員会を開催して、何らかの新たな事業を実施したいと考えております。また、いろいろな保健福祉部に関わる対策事業もありますので、それも精査して、子どものこれからの将来に係るような事業がたくさんありますので、その周知啓発をしながら。新たな事業もですが、第3の居場所や子ども食堂との連携について、子ども食堂は地域のほうで充実した活動がされております。この間、子ども食堂の会議に行ったところ、大島支部をつくるというような話になって、その方向性で動いていくことになりましたので、また何か一つ、子ども食堂とも連携しながら、事業をつかっていけたらと考えているところでございます。その際もちろん教育委員会とも連携して、御協力をお願いしたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

(市長)

福祉政策課は日頃からいろいろな関係機関と連携、調整をしながら仕事を進めていると思いますので、ぜひ、新たな取組についても、教育委員会やSSWの方々とも連携して、しっかり意見を聞いて、今あるいろいろな家庭の問題、課題に対して、しっかりと効果のある取組を、一つでも多くの家庭や子どもさんを救う、助けになる、そういう取組を考えていただきたいと思います。

つながる相談室の件なんですけれども、この学習・生活支援事業なんですけれども、昨年度から、末広の居場所づくり事業の利用者が格段に増えているわけなんですけれども、コロナが明けてとか、いろいろ理由があるんだろうと思うんですけども、おそらく、これは学童的な機能も果たしてもらってるんだろうかと、子どもたちが放課後に行って、ちょっと時間を過ごすとか、そういう機能としてはありがたいなと思います。その一方で、令和6年からは中学3年生の利用者が増えて、港町での学習支援というものをやってるわけなんですけれども、受験対策などをやってるということなんですけれども、これは、もしかしたら各学校でもこういった支援を、要は受験対策とか、勉強になかなか追いついていない子に対する、中学3年生だけではなく、中学1年、2年、そういう子に対する補習的なものは、この民間の団体だけじゃなくて、各学校でも実は必要だったりするんじゃないかなと思うんですが、この辺は教育委員会はいかがですか。

(学校教育課)

学校によっては、夏休みに校長室を開放したりとか、中学校3年生に対して図書室を開放したりとかして、学習を支援している学校があります。私もだったんですけど、業務改革が言われている中ですので、なかなか1日とか設定するのは難しくて、半日開放したりとか、そういう案内をして、子どもたちに補習をしている学校が実際はあります。

(市長)

たしかに業務改善というのが片方にありますので、そのバランスは難しいなというふうに思うんですけども、ぜひ、そこは、必要とする子たちには、もちろんICTツールなどもありますけれども、対面でのそういった補習なども、先生たちの余力のある範囲の中で、検討していただきたい。今までどおりということですね。なるべく、必要に応じて実施していただきたいなと思うところであります。

これはSSWの先生方に聞きたいんですが、先ほどの話の中でも少し出てきましたけれども、教育委員会の資料の1ページ目ですけども、一つは、学年が大きくなるごとにちょっと人数が増えていく傾向が気になります。そういう意味ではやはり早期対応は小学生ぐらいのうちから、対応が必要なのかなと思うところもあるんですけども、3年生、令和5年度に20名とあって、この20名が中学を終わったあと、きちんと進学なり就職なり、何かしら社会的自立をしているのかなというのが気になるんですけども、先ほどは、そこは経済力のある親であれば、きちんとそこはできているというような話だったんですけども、この20名がどうなってるのかなというのは気になるんですが、その辺は分かりますか。

(スクールソーシャルワーカー)

分かる範囲内で、私たちが関わっている中では、学校に行かなかった子もいます。また、学校には行ったんですけど、高校で、やはり不登校でつまずいてる子もいます。順調に行っている子は半々ぐらいかなという感じです。

(スクールソーシャルワーカー)

私もちょっと補足なんですけど、人数に関しては、先ほど学校教育課からもありましたように、その学年によって、元々多くてそのままいく学年もあれば、その学年の雰囲気というのがありまして、小宿に関しては、なかなか不登校が出ない学年というのもやっぱりあるんです。あとは、中1、中2のときには理由のない、はっきり分からない不登校だったのが、3年生になったら進学というものを意識し始めて、学校に来るようになるというケースもあります。ただ、行ってからつまずいて、頑張ったけれども、最初はよかったけれども、中学校のときの基本的な生活習慣ができなかったばかりに、なかなか厳しかったというのもやはりありますので、先ほど言ってた件なんですけど、夏休みに不登校の子たちを呼んで、時間外の先生たちが積極的に宿題をみたり、1学期にできなかった

学習を応援したりという姿は、学校のほうでは見られています。

(市長)

もう一つ、先ほど申し上げたような、小学生のうちには人数的には少ないんですけども、中学校になるとだんだん増えていくというところで、そしてまた、SSWの先生のマンパワーも限られている中で、どこかに重点を置いた取組をされているのか、もしくは、どうしても中学校は人数が多いので、中学校にかかる割合のほうが多いと思うんですけども、できれば本当は、小学校の早いうちからやっていったほうがいいのか、あるいはまた、子どもによっても深刻さのレベルがあるんじゃないかなと思って、深刻度が軽度から重い子までいるんじゃないのかなと思って、その辺、SSWの先生の中でも、もうちょっと人数がいれば分担をして、なるべく軽度で早めに復帰させるSSWと、深刻な子に対応するSSWとを分けたほうがいいのか、何か、そういったことは考えたりされますか。

(スクールソーシャルワーカー)

私たちが思っているのは、小学校のときにはどうもなかったんですけど、中学校に上がると不登校になるという。小学校のときは来てたんですけどってよく言うんですけど、中学校になって不登校というところでいろいろ話をすると、やはり小学校のときからのつまづきなんですよ。中学校になっていきなり不登校になるということではなくて、やっぱり小学校のときからいろいろあったのに、なんとか小学校のときは行けて、中学校になったら、思春期もあって。私は、小学校と連携をとりながら、学校に来ているので、何も気づかないこともあって、しかし、その中に子どもたちはいろいろ抱えてるものがあるって、そこをなかなかやっぱり見抜けなかったというのは非常に大きいなと、私たちは関わりながら感じるものがよくあります。

(スクールソーシャルワーカー)

先ほど教育長先生がおっしゃったように、実際、本当に不登校だったり、例えば非行だったり、昔から思ってたんですが、そういう子どもたちは先生方も家族も考えますし、いろんな立場の方が手を差し伸べるんです。もしかしたらってというような、あの子はちょっと危ういんじゃないかなということも早い段階で見つけていくこともすごく大切だなと私は考えてまして、それはPTAのときに思ったんです。だから、何かある子どもたちはみんながいく。だけど、ほかの保護者が、うちの子たちは大丈夫かなって、役員じゃないから何もできなくてごめんなさいねって言ったけれども、私自身は、いや、そうじゃなくて、自分の子どもをちゃんと見てくださいと、自分の子どもをまず見るのが一番大切なことだから、何か心配なことはないかという意味でやってくださというふうに私は言ってたんです。私は小宿中校区にいますので、小学校のときのまま上がっていくし、兄弟の状況が分かるので、あっち行ったりこっち行ったりしながらやってるんですけど、小学校のうちの状況の把握、伝達というのが大事かなと思います。

あとは、小学校は担任が1人でずっと見てるんですよ、朝から夕方まで。中学校は教科

担なので、いろんな先生がその子を見るんですね。子どもたちもいろんな先生にいろんな情報発信をするので、見つけやすい。ただ、小学校の先生は1人で25人から30人を見るので、その辺というのは一生懸命やってるからこそ見えないところもあるのかなと思うんですが、その辺は、小学校のうち、子どもの身なりから、あと、親の姿も見やすいので、その辺の関係性をよく見届けるような雰囲気があったらいいのかなと思います。

(教育長)

関連して、これはちょっと変わった見方というか、逆説的ですが、不登校があまりにも今深刻な話になってるので、あまりにも悲観的に考えると、子どもを駄目にしてしまうという、その一方で、そういう見方もあると思うんです。もう少し楽観的に考えて、不登校になったな、じゃあみんな協力して何かやろうか、そういう機運というか、むしろ、その子の人生にとって不登校がもしかしたらプラスなんじゃないか。そして、それを乗り越えた先に、その子の新しい人生が切り開けていくんじゃないかという、そういう見方も我々大人には必要なんじゃないかなと。不登校によって育つ子どももいるということじゃないのかなと。そこも見極めが、果たしてその早い段階でできていたら、そういう子どもたちの立ち直りも早いのかなという気がします。

(スクールソーシャルワーカー)

最近、中学校で、学校がうまくいかずに休みがちの子がいたんです。その子の原因が何かというふうに探したときに、たまたま県のスクールカウンセラーの先生がいらして、担任と保健室の先生、私、生徒とそのお母さんと話をしたときに、この子の不登校は心の問題ではないと。たぶん、きっと、この子の将来に向けて、今喝を入れなければ、きっと、この子の将来はちょっと厳しいかもしれないと、お母さんにちょっと厳しく言いますと。そのスクールカウンセラーの先生が、その子どもに対しても、お母さんに対しても、逆に私たちには、大人として間違っていないからそのままのと言いなさいと。今頑張らせましょうというふうにして、スクールカウンセラーの先生がお母さんに対しても、子どもに対しても、厳しいことを、そして今のままではいけないよということと、そして、でもあなたにはいいところがあるよみたいなことで、関わったんです。なので、先ほどから言うように、連携というのはすごく大切なのかなと。その子が本当に今のままでいいのか、でも、今のままだもいいかもしれない、先生の思うような発想というのはとても大事だと思いますが、不登校という言葉と、貧困云々という言葉がすごく表に出てることも、私たちの中では共有できることであっても、それを知られたくない人たちもやっぱりいるので、そこら辺のことも、やっぱりデリケートなことなので、考えながら私たちも関わっていかないといけないのかなと思いますので、本当に連携することはとても大事かなと思います。

(市長)

あと二つほど質問をさせていただきますが、これは前回の議論と関連する部分での質問でありますけれども、まず、これは私のマニフェストにも書いている部分であるんですけ

れども、先ほども教育委員会から話が出てきましたが、学校や校長先生、学校の先生方に対する研修という部分なんですけれども、前回の2月5日のこの会議の議論の中で、そのときに、その年度中に、次の校長研修会、教頭研修会でもこういう話をすると、研修するというようなことであつたんですけれども、その辺の実施の状況であつたり、ちゃんとした講師の先生がいるのかなと。要はSSWの先生方だったり、もしくは不登校についての専門的な講師の先生がいるのかなと、そこをまず確認します。

（学校教育課）

本年度においては、校長研修会、教頭研修会、市の生徒指導主任等研修会で、先ほど御説明しました奄美市の今後の取組を、校長、教頭、生徒指導主任には話をしました。生徒指導連絡協議会というのも各学期に1回開かれてまして、そこは高校の先生まで交えて参加していただくんですが、その第1回で児童相談所の所長に来ていただいて、お話しいただきました。それ以外に、SOSの出し方・受け方講座ということで、健康増進課が主催する会に、学校教育課のほうも参加要請を受けまして、各学校に参加を呼びかけたところ、65人程度の先生方が参加していただいて、SOSの出し方・受け方を学んだところです。その生徒指導連絡協議会が、今年度は教育相談に特化して、私のほうから説明をしまして、各学校の現状や相談の状況、悩み等を各学校でまた話し合っていて、今の課題とかをお互いに解消して、いいところは持ち帰るとかというふうな工夫をしました。来年は、先日相談させていただいたんですけど、今は健康増進課のほうで、学校教育課が参加させていただいてる形のSOSの出し方・受け方講座ですので、先ほど教育長からもありましたとおり、学級担任と子どもたちが一番密接に関わってますので、先生方に特化した、全学校のできるだけ多くの先生方が参加できるような研修を来年実施していきたいなところで、昨日相談をさせていただきました。ということで、また来年度以降充実させていけたらなと思っております。

（市長）

今日の議論、福祉政策課が用意した資料を含めて、ぜひ、いろんな分野での連携協力が図れるような研修をしていただきたいなと。現場の校長先生、教頭先生、そして担任の先生など含めて、奄美市が総合的にやっている取組がきちんと伝わるようにしていただきたいなと思います。時には専門的な、SSWの先生とか、先ほど児相の先生というお話もありましたけれども、そういったところもぜひ参加していただいて、やっていただきたいなと思います。

あともう一つが、先ほど教育長からも非常に前向きなお話を頂いたんですけど、これも前回、関連する議論があつたんですけれども、必ずしも学校復帰を目指さなくてもいいというか、そこにこだわり過ぎる必要はないだろうと。社会のどこかにつながりを持つてるようにしていくことが大事じゃないかということで、ふれあい教室であつたり、あるいはフリースクールであつたり、あるいはSSWの先生とか、あるいはまた、オンラインを活用した何かしらの支援機関とか、どこかに接点があるという状態をつくっていくこと

が大事なのかなど。この不登校者の解消も大事なんですけれども、それ以上にどう対応するか、どう支援するかという意味で、そこが大事なのかなと思うんですけれども、そこで、改めて教育委員会として取り組む方向性であったり、あるいは、目標とか目安とかを考えていったらいいんじゃないかなと思うんですけれども、そこはいかがですか。

（教育長）

先ほどから出ているように、地域との共同作業といいますか、昔はそうでしたよね。地域の方々が一緒に子育てをして、みんなで育てていくという機運があったんですけど、そういうものをもう一回つくる。そのために学校が、今は学校評議員ということで、外部の方々の意見も取り入れるようにしています。そういうことをこれからもっとやっていく必要がある。地域と学校がもっと密接につながるような、そういうところをもう少し考えていく必要があるのかなと思っています。これまで、奄美には結いというつながりがあったわけですけど、それが奄美市に今もあるのかなのか、ちょっと私はその辺が分からないんですけど、地方に行くと、そういうつながりが今でもしっかりあって、そういう機能をしているわけですけど、奄美市には果たしてそういう機能がまだあるのかどうか、そこは若干私も分からないですけど、もしあるとするならば、これからもそういうものをつくり上げることができるのかなど。もしそれができるのであれば、そこからまた、お互いの知恵を出し合いながら、不登校なり、いじめなり、そういう対策も全体でできていくのかなと思います。まず学校としては、そういう方策を考えていきたいなと思っています。頭の中には構想はあるんですけど、今はちょっと具体的に話せないというところです。

（教育委員）

関連して。例えば、スクールソーシャルワーカーの先生方が家庭の中に入るでしょ。それを、学校にどんな形で伝えているのでしょうか。私がいるときは、週1回の生徒指導委員会の中に必ず相談員なりスクールソーシャルワーカーを入れて、先生方が見た家庭の状況とかをみんなで共有をして、そして生徒指導委員会が終わった翌日も、職員会議で、前日の生徒指導委員会ではこういうことが課題になったと、そこに関わる担任の先生方は、こういうことなのでこういう関わりを持ってほしいということ、次々やっていったんですけど、そこでの見たことが、どういう観点で学校に伝わって、校長、教頭から各担任や職員に伝わっていくのか、その辺りが課題だと思うんですよね。先ほど、教育長が言ったように、私たちの時代であれば、この家庭とどこの親が一番近いかって、その親を通してその子どもとの関わりを持つ、その地域の中で、この人の言うことならこの親は聞くだろうという、そういう根回しというか、そういうことの中で子どもたちを育てていくという教育風土をつくっていったような気がするんですけど、その辺りはどうなってるのかなと思っています。

（スクールソーシャルワーカー）

私たちも家庭のほうに訪問に行ったときには、必ず先生たちへの報告と管理職への報告と、それで少し子どもたちの話をしたり、親と話をしたり、少し学校のことで、いろんなことでちょっと苦言があったりとかしたときも、それもちゃんと伝えてます。伝えて、それを管理職のほうからまた担任のほうに伝えたりすることはきちんとできています。

それと、先ほど地域の中でと言ったんですけど、一つだけいい取組があって、笠利のほうで、学校にずっと来ない子どもなんですけど、農園に行くんですよね。その農園に行くのをすごく学校が連携をとってくれて、学校と農家さんと。その農家の農園の中で一日行ったら、それを必ず、その子どもが今日こんなことをしたということをもた、私服のまま、制服を着けることはないんですけど、話をしに行って、そこでうまく連携がとれてるという例もあります。

(スクールソーシャルワーカー)

私の場合は、家庭を訪問する際は必ず担任と話をし、そして学校と連携をとった上で訪問し、そしてその都度、必ず、先生が学校にいるときに、今日はこんな感じでしたということも報告し、生徒指導部会でも伝えて、できるだけ紙で書くのではなくて、その状況を口頭で、先生たちがたくさんいるところで、いろんなほかの先生に、中学校は特にですけど、いろんな先生たちにその状況を知ってもらうように、口頭で伝えてます。

先ほどの農園の話もそうなんですけれども、地域でのふれあいというのは、私は今、社会教育委員をして、社会教育の会も行くんですけど、今年度はもっと話をしたいと思っているのは、地域の活動、昔あった子ども会活動や青年団活動、いろんな活動の中で子どもたちが参加することによって、自分の親じゃない、近くのお兄ちゃんやらそういう人たちをモデルにして、自分も将来、こんなふうになりたいみたいな感じを持って育ったと思うんですけど、教育長先生がおっしゃったように、不登校対策という一つのことだけではなくて、地域の力を借りながら、最終的に子どもたちが、学校やいろんな地域とふれあいながら大人になっていくというような雰囲気づくりができたらいいのかなと思って、私たちの仕事も、とりあえずスクールソーシャルワーカーという名前がついてますけど、近所のちょっとしたおせっかいおばさんという気持ちで私たちは日頃関わっているので、私たちだけでは無理だったら、地域をまたいだ誰かに相談しながら、この人はこの人とつながってるなとかいうのを、この人の話だったら聞きそうだなというのをみんなで共有しながら、情報交換するときにはそういうことをしながらやっているんで、今後もそういうことをやっていきたいと思っています。

(市長)

これは質問というより提案でありますけれども、ぜひ向教育長の背中を押していきたいと思ってるわけなんですけれども、今回、前回の議論をしっかりと踏まえて、市として、あるいは教育委員会としてどうするか、何をするかというところで、ぜひ何か、不登校を含め、そういった背景にあるいろいろな問題、課題の解決を目指すため、何かしらプロジェクトチーム的な場をつくって議論していただく。SSWの先生はじめ、福祉部門、個別の

ケース会議はあると思うんですけども、この問題に正面から向き合う何かしらのチームをつくって、議論をして、そこから具体的な政策、事業を生み出すというのをやっていただくか、もしくは、教育長が先ほどおっしゃった、地域と学校のつながりを強化するための、どこかモデル校なりモデル地区を幾つか決めて、実際に事業として取り組んでいただくとか、やっていただいたほうがいかなと私は思います。数字をもって、あまり悲観しすぎてはいけないというお考えも十分に分かりましたけれども、それでもやはり、困ってる家庭や苦しんでる子どもさんとかもいると思いますので、何もしないということはないんですけど、今もいろいろな取組をやってるんですけども、そこをまたさらに、地域の力を借りるなり、もしくは専門機関の力を借りるなりしてやっていったほうが良いというふうに私は思いますので、ぜひ教育長の構想の具体化、現実化というところも含めて、新たな取組をしていただきたいということを、提案というかお願いというか、申し上げさせていただきたいと思います。

（学校教育課）

あるスクールソーシャルワーカーが、夏休みの各学校で、週1回とか、ご飯を作って、子どもたちを呼んで、ご飯を取れない子たちがいるということで、今、取り組んでいただいています。笠利地区も今後していただけるということで。こういう子どもたちは家からなかなか出られない子も多くて、学校に対する思いがいろいろある子もいて、学校に来てもらう状況を作るというのも大事なのかなと、そういういろいろな取組もしていただいて、有志ですので、こちらから言っているのか分からないですが、紹介します。

（市長）

行政、教育委員会、そして、SSWの先生もいるし、民間のいろんな団体なども、子どもたちを支えようと、いろんな取組をやってるというのは十分感じてるんですが、そこをしっかりと整理していただいて、誰がどういう取組をやってるかというのを整理していただいて、重ならないように、支援が重複しないように、必要な学校、必要な地域、必要な子ども、家庭に何かしら行き届くような、何かそういう取組をぜひ、教育委員会と行政と、そしてまた民間とで協力しながらやれたらと思います。もちろん、SSWの増員というのも大事なテーマだと思いますけれども、そこも含めて、何が必要なのかというのをしっかり見極めて、やるということが大事じゃないかなと思いますので、また引き続き、どうかよろしくお願いします。

（教育委員）

お二人のスクールソーシャルワーカーの人たちだけに荷物を背負わせない、そのためにもこういった関係で情報共有するというのは大事だと思うんですよ。それで、私だってできることがあるし、市長さんだってできることがあるわけだから、やっぱりみんなで情報共有をしながら、それぞれができることをやっていけば、奄美市の子どもたちが1人でもいいから救われたらいいんじゃないですかね。そんなふうにして持っていけたら。

(市長)

今、おっしゃったことに尽きると思うんですけれども、奄美市の新しい総合計画、奄美市未来計画の中で、官民連携、官民対話を重視していこうということで、市役所の各部署でそういう取組を始めていますので、ぜひそこは教育委員会が音頭をとっていただいて、やっていただきたい。奄美市の新しい未来計画に基づいてやっていただきたいということを申し上げて、終わります。

以上